２０２１ 沢便り６　大神楽の焚き火、おカシラ様の路

神流川水系・大神楽沢(2021/8/29-30)

Ｉ崎、Ｈ口

　西上州の最奥部、上野村の諏訪山登山口には２台の車が停められていた。その横へＩ崎車と僕の車を停める。これら４台はすべて我が銀座山の会のものだ。
　しかし前の２台は日帰りで来ているＴ野パーティーのもので既に沢に入っている。一方、Ｉ崎さんと僕は前日の自転車合宿からこちらへ回り、ゆっくり山中で１泊する計画にしたため同じ沢に時間をずらして入ることになった。
　これから遡行する大神楽沢は西上州の最奥に位置する山の一つ諏訪山を起点とした神流川上流部の沢である。合宿からの帰りに寄って行ける面白そうな沢はないかとＩ崎さんが見つけてくれた。

　１１：３０、駐車場を出発。階段を下りると“大”神楽という割りには細い沢が流れていた。少し行くと逆光のように暗い堰堤が現れた。
「これは右からですね。」
　堰堤の上は伏流となりガレた岩場を歩く。しかし前に来た神流川の沢もそうであったがこういう先に魅惑的な沢が広がるのだ。ほら。

　両岸斜面には乾いた色の落ち葉、苔の生えた角張った岩の中を水流が走る。静かで開けているが明る過ぎない景観。
「なんか奥秩父の沢みたいだな。」
「地図上では隣ですからねぇ。」

　１時間弱で二俣に着き一本入れる。ちょうど昼時なので先ほど買ったとろろ蕎麦を取り出した。昨日の宿の食事がまだ胃にもたれていて軽いものにしたかったから。
　食事を終えて再び歩き出す。
「しかしあれだよなぁ。ツルツルトロロって沢じゃちょっと縁起悪いよなぁ。」
　ちょうどぬめりのあるナメに差し掛かっていた。足元に気を付けねば。

　アクセントのあるゴルジュが続く。縞目のある岩など太古の海が隆起した地層なのだろうか。細くえぐれたスリットゴルジュも現われ昨年行った神流川水系の橋倉沢を思い起こさせる。特筆すべきは水の透明度だ。プールになった所の水が澄んでいる。
「これこの上にさぁ、人工物が無いから水がきれいなんだよ。」

　ところで今日のテン場だが、標高９００ｍを越えてから良さそうな所があるらしい。そろそろ気にしながら歩こうか。
　二段の滝があり、上部は真っ直ぐ落ち下部は左に曲がっている。そこを上がった所だった。右腕上部にチクッと痛みを感じた。同時に左腕下腕部にも。はたいたら虫だ。虻か？蜂だといやだなぁ。ズンとした痛みがある。まずい。ザックを下ろしポイズンリムーバーで何度も吸引をした。Ｉ崎さんがムヒＥＸを出してくれ塗らせてもらった。
　落ち着いたので歩き出す。するとすぐの上の所、左岸に広い台地があった。ここだ！今日の行動はここまで。ちょうど１４時だった。

まずビールを冷やしに掛かる。次に焚き木を集める。少し湿り気はあるが大丈夫だろう。その後ロープを伸ばしてタープを張った。これだけ平らな所はなかなか無い。いやいや素晴らしいテン場だ。
焚き木に火が点くと、取り敢えずフランクフルトを焼いてプシュッ！と乾杯した。今回は初日の行程が短いのでＢＢＱでもやろうということになったのだ。変わりどころでは手羽先を焼く。ナスと玉ネギを焼き、味付けカルビ肉。
「あれだな、ここ沢の感じもいいし、お試し山行とかで新人連れてくるのにいいよな。なんたってこのテン場が最高、うん。」

持ち込んだビールと日本酒がなくなるとＩ崎さんいわく「非常用に持ち込んだ」というウイスキーを取り出した。
「今から非常事態宣言だ～！」
宣言は２０時過ぎに解除となりタープの下へ潜り込んだ。

５時過ぎに起床。幸いなことに雨にも降られずタープに朝露も付いていない。昨日虫に刺された所も問題なくて安心した。焚き火を熾しなおすと青白い煙がもくもくと上がって行く。沢音だけの何とも心地好い森の朝。
今日はまず沢を詰め上がった諏訪山を目指す。昨日は標高で２００ｍしか上がっていないが、今日は５００ｍ上がらねばならない。できれば昨日のうちにもう少し高さを稼いでおきたかったが、こんなテン場はおそらく他にないだろうから仕方ない。

出発は７：３５になった。歩き始めてすぐ、前方高い所から滝が二段に落ちていた。しかしそちらは二俣の右俣の方で、我々はほぼ直角に折れた左俣へ行く。

改めてこの沢の渓相は美しい。岩肌が赤い層になっていたり、露出した岩の細かな筋目に沿って苔が生えていたり、なかなか見応えがある。

落ち口の下が斜めに切れ落ちている４ｍハング滝。水流はその下にせり出した岩に落ち、そこから広いプールに注がれる。その水の色は深く澄んだラムネ色で神秘的だ。
「きっとＴ山さん（水の女王）、ここで泳いだでしょうね。」

ハング滝は右岸をジグザグに巻いて越えた。次には縞模様のえぐれたようなナメ。滑りやすく倒木を使いながら上がった。上がった先には黒く濡れた高い壁があった。２５ｍ大滝である。水量は多くないが黒曜石のようにテラテラと光る壁には手掛かりなど見えない。ここは左岸を高巻くらしい。手前の斜めに走るラインから上がろうとしたが、最初の所で体を持ち上げられるような手掛かりが無い。場所を変えて様子を探るがここも難しい。どうするか。そんな時Ｉ崎さん、もよおしてきたらしく
「ちょっと行ってくる。どこか上れそうな場所探しておいて」とザックを置いて消えてしまった。

さっき諦めた所で浅い手掛かりを頼りに体を持ち上げようとしたら支点の岩が剥がれ上がらなかった。どうしたものか。
すると下流に行ったものとばかり思っていたＩ崎さんが右岸の小高い所から下りてきた。

「どう？やっぱりそっちじゃないよな。なんかさ、右岸の方が上がれそうな感じしないか。踏み跡みたいのもあんだよな。」
　わざわざ高い所へ上がって用を足したのか。でもそのおかげで道は開かれた。上がりやすい肩まで行った所から斜面をジグザグに上がる。もう滝の頭より高い所まで来たんじゃないだろうか。すると滝の方へ向かって行く踏み跡みたいなものが見えた。
「ちょっと上がり過ぎじゃないですか。向こうに踏み跡みたいのがあります。」

　踏み跡を辿ると滝の頭よりだいぶ上まで来ていた。下りられそうな所はないかと探すとちょうど凹角になった所がありそこに目を付けた。凹角はストンと落ちていたが足掛かりがあったのでそのまま慎重にクライムダウンした。うまい具合に滝の頭へ下りられた。もちろんここで一本取る。
「ノーザイルで来れたな。左岸を上がるってあったけど、上がってもほらあそこから懸垂下降必要だろう。どう見ても右岸が正解だよ。」

　その後も奥秩父に似た渓相が続く。流れが細くなってきた所で水を１ℓほど汲んだ。まだあと３００ｍくらい上らねばならないのだ。
　水が涸れた沢形に苔むした岩がゴロゴロしてきた。シダ類も出てなかなかの景観だ。１３００ｍくらいの所でハーネスやスパッツを外し登山靴に履き替えた。ストックを取り出して登山モードにカスタマイズする。

　上りが続く。少し進んではまだあとどのくらいあるのか高度計に目が行ってしまう。ジグザグを切って詰め上がるとやっと登山道に出た。そこからわずかで諏訪山の山頂に到着。１１：３０であった。頂上は木立に囲まれ眺望は無い。しかし西上州最奥部の一つの頂上に立ったのである。

　さて、下りにかかる。痩せた尾根を下って行くと上方に三角に盛り上がったピークが見えた。何とあそこまで上り返さねばならないそうだ。
　三角のピークは三笠山。途中に斜めに立った岩場があったものの、下から見上げた時に感じたほどには上りが辛いわけではなかった。祠が立っており見晴らしは良好。なるほどあれが諏訪山か。群馬、長野の県境辺りの懐が見渡せる。祠の前にある細い路を下り始めたがボサが掛かり歩きにくい。Ｉ崎さんの足が止まり
「いや、こっちじゃないや。」
　正しい下山路は祠の後ろにあった。いやいや表示も無くわかりにくい。こういうところが西上州の山らしい。

　急な岩場を下りると、今度は土の斜面にロープが垂らされ、一本終わると二本目、そして三本目と連続で急な斜面を下ろされる。なかなか厳しい帰路である。途中に屋根と入口が朽ちて役に立ちそうにない避難小屋があった。ここから中間点の湯沢ノ頭（ゆざわのかしら）まで１時間弱掛かるらしい。
「そんなに時間掛かったっけかなぁ。」
　Ｉ崎さんは昨年登山として諏訪山を往復したことがあるそうだ。
「あのピークがカシラじゃないか」と言うが路はピークには向かわず脇をトラバースして過ぎてしまう。目指すカシラはまだまだ先のようだ。
「おカシラ様ぁ、おカシラ様ぁ」とＩ崎さんの祈りの声が漏れてきた。稜線を歩いているが木立に覆われており直射日光から守られているのが救いだ。

やっとおカシラ様の分岐を越えた。浜平方面へ下って行く。登山道が右に折れると見下ろす先は長く急な斜面でジグザグを切って続いている。その長いこと長いこと。靴の中でつま先が当たり、膝に負担が掛かる。歩きながら繰り返し思ったのは「足の爪を切っておいて良かったな」という事と「ストックをもう１本持ってくれば良かったな」という事。とにかくこの斜面を下りきらねば帰り着けない。

沢の音が聞こえてくると沢形に水が流れ出し、右岸から湯ノ沢が出合うとようやく斜面の傾斜が落ち着いてきた。沢沿いに付けられた登山道を行くが、膝は疲れ、腿の外側には張りを感じていた。

登山道には時々「諏訪山→」とだけ書かれた標識が立っている。上りの人に向けて立てられた標識だが、これを見ただけでは諏訪山へ行くのがこの先どれだけ大変かわからない。かえって「〇〇ｋｍ」とか書かないことによって上らせようとしているのだろうか。

１５：００、ようやく駐車場に辿り着いた。グータッチ。これはこれはお疲れ様でありました。

Ｉ崎さんの車の後ろのワイパーにメモ紙がはさんであった。Ｔ山さんからだった。『下山が長かった。１５：５０』

同感、同感。本当に長い下山路でありました。テン場も沢も最高だったけれどお試し山行には推薦できないか。ところでＴ野パーティーは昨日何時出発だったのかな。大滝をどっちから越えたのかな。戻ったらいろいろ聞いてみたい。同じ沢を仲間がどう楽しんできたのかとても気になる。

何はともあれ、この長い下山でヘトヘトになった身体にはまず温泉が必要である。幸いすぐそばに『しおじの湯』がある。簡単に着替えてから車のエンジンを掛け駐車場を後にした。疲れてはいたが、心には西上州の最奥部まで行って戻ってきたどぉという充足感があった。

（Ｈ口　記）